

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 野澤暁子

論 文 題 目

バリ島の鉄製鍵盤打楽器スロンディンの文化
—トウガナン・プグリンシンガン村の事例より—

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	嶋田義仁
委員	名古屋大学教授	阿部泰郎
委員	名古屋大学教授	加藤久美子
委員	名古屋大学准教授	東賢太郎
委員	名古屋学院大学教授	今村薫

論文審査の結果の要旨

「本論文の概要」

本博士申請論文は、インドネシア・バリ島農村にみられる鉄製鍵盤打楽器スロンディンの文化を、トゥガナン・プクリンシンガン村の事例により解明を試みた芸術・宗教人類学的研究である。スロンディンはガムラン楽器の一種であるが、通常のガムラン楽器が青銅製で演奏が観光化しているのに対して、伝承村で村外不出の儀礼楽器として演奏された鉄製鍵盤打楽器であり、それだけバリ島農村文化に根差した神聖楽器である。そのうえ調査村は稲作地主村という特異な政治経済地位にある。3部構成からなる本論文は、このようなスロンディン文化とそれを支える複合的な経済・社会・文化・宗教体系の解明を試みる。

第Ⅰ部は、トゥガナン村の生業経済と社会構造、生活様式、信仰文化の分析であり、次の特徴が析出される。1)バリ島文化は15世紀末ジャワから伝来したヒンドゥー文化に支配されているが、調査村は先住民村であり、バリ島固有の宗教文化(巨石・水信仰、祖霊崇拜、山×海の二元対立的世界観)も残存する。1年を生死サイクルとする時間観念があり、年間200以上の儀礼が行われ、主要儀礼は稲作儀礼と対応している。2)調査村は稲作田約225haを有し、正規住民は稲作労働に従事しない地主村である。それゆえ正規住民は小作民に対して特権的地位にあり、スロンディン演奏も正規住民のみに許される。3)正規住民間にはしかし村内平等主義があり、収穫稲の平等分配、同規模同一構造住宅の平等分配がなされ、村内役職就任も年功序列である。他方村内婚原則があり、違反者は正規住民資格を剥奪される。4)長方形内部を南北方向に3本の道路がのびる村は、各道路沿い集落を単位として3区分され、その東端集落は、非正規住民集落である。

第Ⅱ部では、スロンディン楽器の特徴、分布、由来を論じた後、地主村という特殊な村落文化におけるスロンディンの特権性が考察される。スロンディン文化が広がるバリ島東部の山地は、10世紀頃成立したバリ島初の王国ワルマデワ王国の成立地であった。そして、この王国がバリ島のクディリ王国と交流し、ともに稲作灌漑文化で栄えたことが古文献の解読分析により論じられ、スロンディン文化はジャワとバリの両稲作王国の文化として形成されたとみる。調査村には、神聖視される二種類のスロンディンがある。神器鍵盤と楽器である。鍵盤は落雷とともに天から落下した生命力宿る神器とされる。楽器は8台1組のスロンディン楽器が3組存在し、正規住民以外の人間の接触禁止、楽器の地面への接触禁止、儀礼外での演奏の禁止、村外持ち出し禁止、という厳しい制約がある。

第Ⅲ部では、このようなスロンディンが、実際の儀礼においてどのように演奏されるのか、9日間の盛大な予祝儀礼「一月儀礼」の分析において明らかにされる。儀礼は、準備期、神への奉納期、祝祭期の3段階によって構成され、着飾った男女の歌踊り、食物奉納、共食儀礼等がある。スロンディン演奏は舞踊のすべてにともなう。儀礼は、田植えに先立つ新年儀礼であり、男神女神が出合い、子孫繁栄と作物豊饒が祈られる。その背後には一年を生死復活のサイクルとみる暦年思想とともに、死者の魂は海に行き山から再生するという海/山の死生観、東/西

の死生観があり、一月儀礼は宇宙論的死生観の発露の場ともなる。特権的な地主村住民のみに許されたスロンディン演奏を通じて、このような世界観が演出され、そのなかで豊穡と子孫繁栄の祈りもなされる。

「本論文の評価」

インドネシア・バリ島は、豊かな民俗芸能を基盤にインドネシア一の観光島となっているが、本論文の主題となるスロンディン文化はバリ島の先住民村といわれる稲作地主村に特権的に伝承されてきた鉄製鍵盤打楽器文化である。本博士論文申請者は芸術学の出身であり、スロンディンという特異な楽器とその演奏方法、演奏音楽についての音楽学的な分析は詳細を極める。しかし本論文での最大の功績は、スロンディン文化を伝承してきた村落の、先住民文化、稲作地主村という特異な経済政治構造とバリ・ヒンドゥー文化以前のバリ島先住民の儀礼・信仰体系を明らかにしたうえで、スロンディン文化とはなにかを詳しく論じたことにある。

そのためになしたことの第1は先住民村が位置する自然環境と稲作中心の生業構造の分析、第2は長方形で南北3本の平行道路で構成される幾何学的村落構造の先住民村の村内社会構造の分析、第3は稲作地主村という特異な経済政治構造が、一方で「特権的な正規住民」と「小作民および非正規部落民」間にある不平等関係によって、他方で正規住民間の徹底的な平等主義に支えられていることの解明、である。かかる稲作村の存在を明らかにしえたことは、それ自体がすでに、アジア稲作文化社会の研究として評価しうる。

本論文はそのうえでスロンディン文化が、稲作地主村の経済的政治的特権とその特権構造に連動した稲作の豊饒儀礼、死生観、自然崇拜とに根差した、複合的な政治宗教的な音楽文化であることを明らかにし、村の儀礼構造とその背後にある宇宙論的世界観まで析出するに至る。それは、稲作地主村を中心に成立している政治経済文化システムが儀礼文化に収斂してゆくかのごとくであり、正規住民のみに許されたスロンディン演奏自体が、地主村正規住民の経済政治的にも宗教文化的にも特権的な地位の表現であるかのようである。人類学者クリフォード・ギアーツは劇場国家論という卓抜なインドネシア論を展開したが、本論文でも、稲作地主村の政治経済文化は「1月儀礼」という儀礼的劇場に収斂されて表現されるかの如くである。それ故本論文は「劇場国家」としてのスロンディン文化村のすぐれた事例研究になっている。しかしギアーツ劇場国家論には、論者も指摘するように、ガムランなどの芸能の具体的関与にかかわる議論が不足している。本論文はそれ故、劇場国家論を事例の詳細な事実に基づいて解明した数少ない実証研究のひとつとして評価できる。しかし本論文は劇場国家論から出発したのではなく、稲作地主村のスロンディン文化の詳細な民族学的分析の結果が、劇場国家論類似の結果に至ったものである。それ故本論文で記述された膨大な民族資料には、潜在するにとどまった独自の理論的発展の可能性が多く含まれ、その解明は論者の今後の研究に対する期待である。しかし、数多くの図表と写真も用いながら、複雑で多面的なスロンディン文化を可能な限り明晰に論じ、スロンディン文化の総合的研究を綿密になしとげた本論文の努力と功績は高く評価できる。以上の理由によって審査委員一同、本論文を博士論文(文学)として合格とした。